

共働き社会の課題

労働政策フォーラム「子育て世帯の働き方を考える～行政、企業、家庭をつなぐ～」

2017.10.3

筒井淳也(立命館大学)

「共働き社会」をどう位置づけるか

- 経済先進国はどこからどこに向かっている？
- 性別分業社会から共働き社会に。
- 「多様化」は実はそれほど見られない。共働き社会への収束。

「共働き社会」をどう位置づけるか

- 「古い標準」から、多様化ではなく「新たな標準」に向かっている可能性。
- 「新たな標準」としての共働き社会における問題とは？

「共働き社会」をどう位置づけるか

- ひとつは、それをどう実現するかという課題。
- ジェンダー平等的なケアの再配分を可能にする働き方や制度が必要。

「共働き社会」をどう位置づけるか

- もうひとつは、「新たな標準」に適合しないケースへの対応。
- 共働き化は、社会的課題の解決の手段であり、最終目標ではないことを強調すべき。

共働きを「どう」実現するか

- 実現すればよい、というわけではない。
- 共働き社会は、性別分業とは別の意味で不自由な社会。
- 夫と妻が家庭で過ごす時間の絶対量が減る。

共働きを「どう」実現するか

- 夫と妻が家庭で過ごす時間の絶対量が減る。
- 「仕事と家庭の逆転」現象。

「家族の時間は、かつては職場の専売特許だった効率性崇拜に屈しつつある。その一方で、どんどん長くなる仕事の時間は、電子メールで友人と話したり、口論をなだめたり、噂話をするなどの社交を快く受け入れるようになる。…長い労働時間の中には、非効率なポケットがたくさん隠されていた。これに対して、平日、彼が目を覚ましている間に家庭で過ごす時間ははるかに短く、彼はその時間を意識して効率的に使っていた。…仕事で時間を忘れることがあったが、家庭では常に時計を見つめていたのである。」(ホックシールド『タイム・バインド』)

「非標準」家庭の問題

- ジェンダー再配分戦略(例:イクメン)は、共働き家庭に特化した解決法。社会的目標にはならない。
- 小さな子どもがいる働き手に「奥さんは?」「旦那さんは?」と聞かなくてよい社会が理想的。

「非標準」家庭の問題

- 「専業主婦(夫)がいる働き手」「働いているパートナーがいる働き手」「誰もサポートする人がいない働き手」では、それぞれ労働に投入できるエネルギーが違う。

「共働き社会」における課題

- 共働きの不自由を抑制する制度的サポートを。育児期のためのサポート（主に行政）ではなく、一般的な働き方の変化（主に企業）を。
- 多様なライフスタイルに応じたサポートを。共働きを前提にしすぎないように。